◆山田道の調査 ―第104次

はじめに

本調査は、県道橿原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事の一環として実施したものである。今回の調査地は、県道の南側にあって、石舞台古墳へ至る農免道路との交差点を起点に、西に約104mにおよぶ範囲である。当地は所謂大藤原京を想定した場合には、左京十二条五坊東北坪・同六坊西北坪にあたり、西端を東五坊大路が通る。

県道拡幅工事に伴う調査は、1988年度以来、今回で8次目である。最西端は第5次調査区で、今回の調査区との総長は東西約670mになる。県道の北側で東西溝の検出があったが、7世紀代の建物や塀が県道部分にのびていることが判明するなど、県道に重複した位置に古道山田道を想定するのは困難なのが現状である。調査は、古代における土地利用の解明を主目的にして行った。

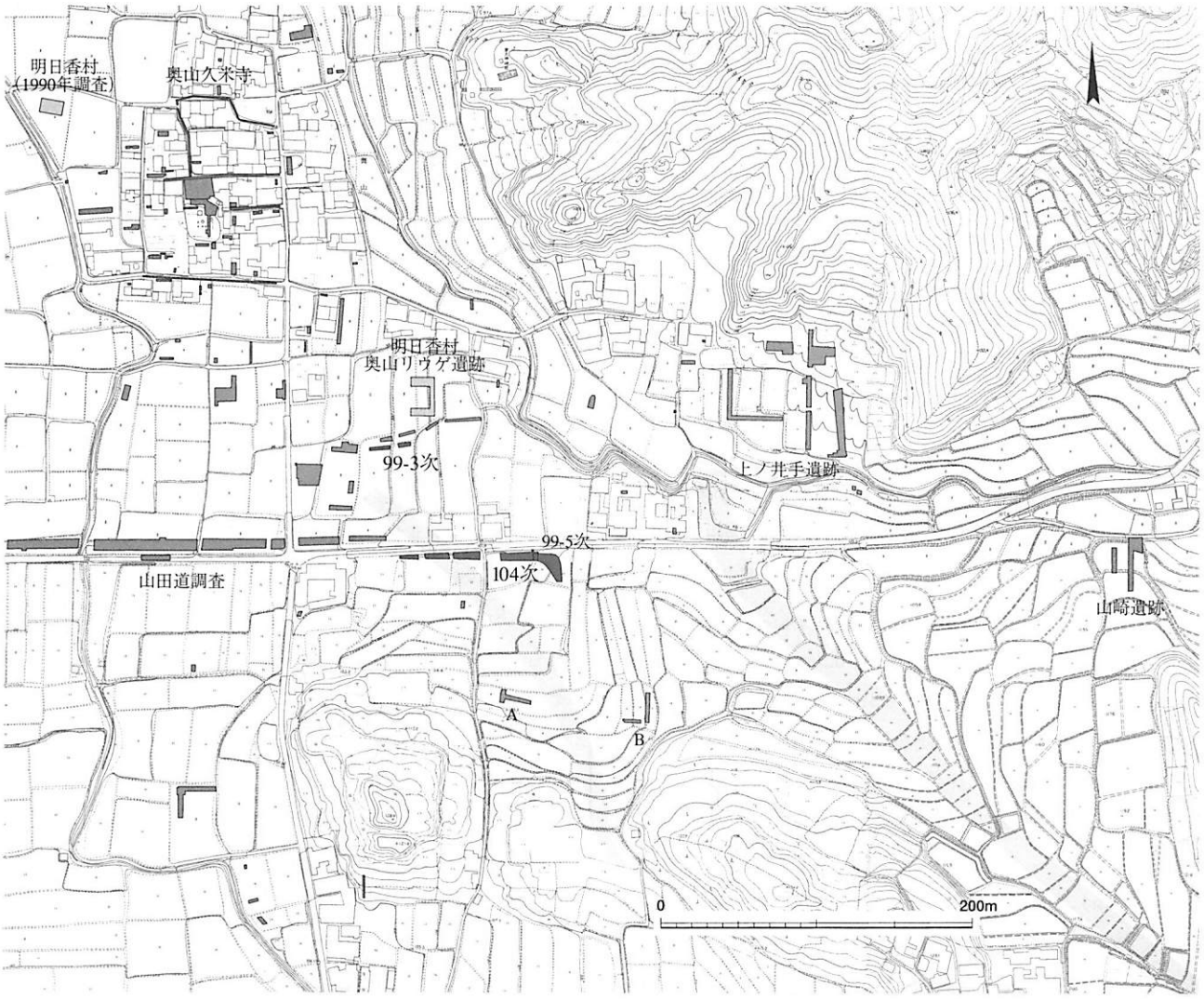

図45　第104次調査位置図　1：4500

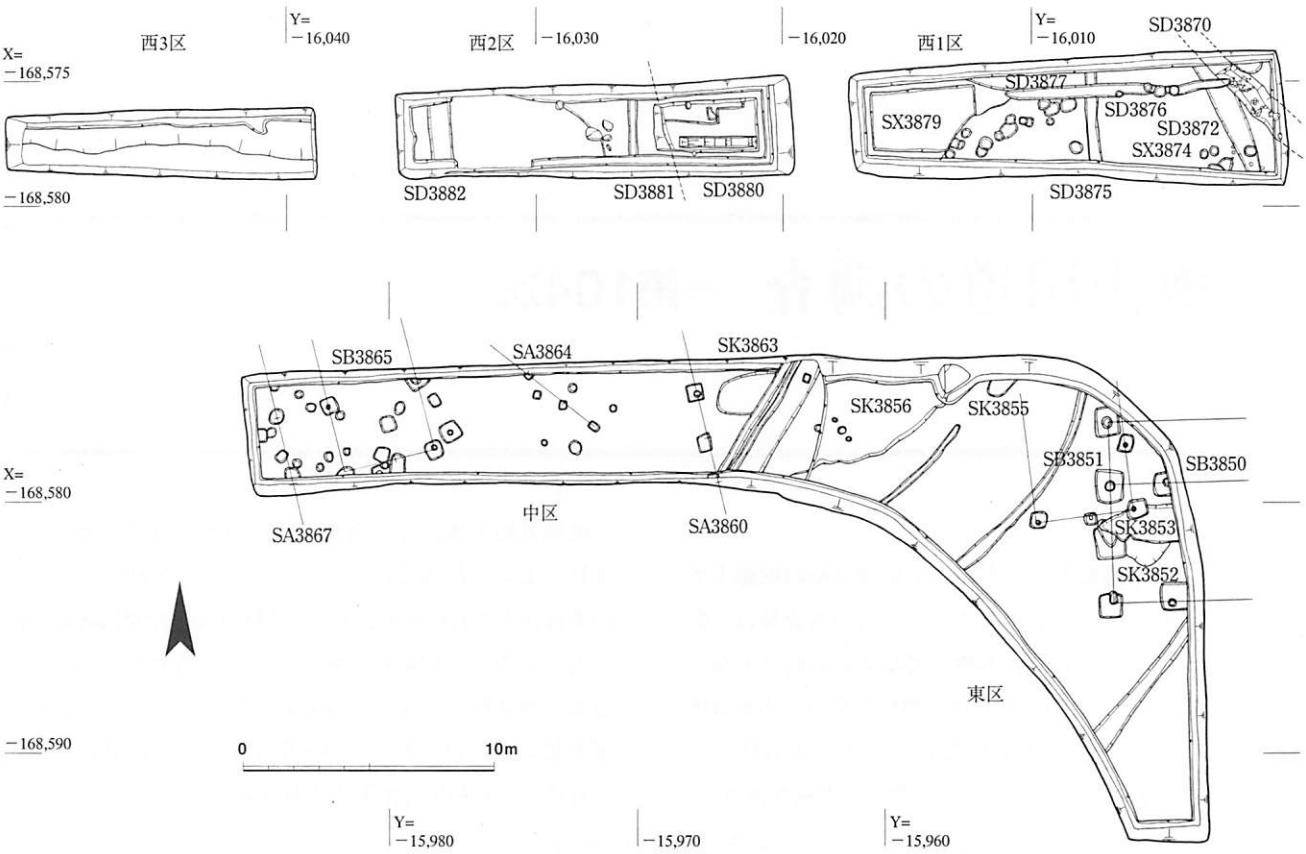

図46　第104次調査遺構図　1：300

調査と検出遺構

調査は、里道や水路によって５区に分けて行ったが、全体が丘陵からの傾斜地にあたっているために、それぞれで状況が異なっており、各区ごとに概述する。

東区　基本層序は上から現代盛土、灰褐色砂質土（耕作土）、炭混褐色土（床土）、暗茶褐色土、黄色砂質土（岩盤地山）である。岩盤地山は東ほど高い。遺構検出は、暗茶褐色土上面と黄色砂質土上面で行った。暗茶褐色土上面では、耕作に伴なう細溝の検出にとどまり、今回報告する遺構はすべて黄色砂質土上面で検出した。

検出した遺構には掘立柱建物２棟、土坑などがある。

掘立柱建物SB3850は、調査区の北東隅部で検出した東西棟建物で、桁行２間以上（柱間2.35m）、梁間２間（柱間2.3m）の身舎に、柱間2.55mで北廂が付く。柱掘形は一辺0.9〜1.3mの方形で、深さは0.5〜0.9m。西妻柱に柱抜取穴があるほかは、すべて直径0.3m前後の柱痕跡がある。柱筋は方眼方位に対し北で僅かに西に振れる。

掘立柱建物SB3851は、建物SB3850と重複する位置にある。柱掘形は一辺0.5〜0.8mの方形で、深さ0.1〜0.2mしか残存しない。確認できた柱穴からは桁行２間以上（柱間2.55m）、梁間２間（柱間1.7m・2.2m）の柱筋が北で大きく西に振れた南北棟建物と推定される。残る柱穴の深さから、丘陵の削平が著しい西北部の柱穴が失われたとみられ、建物の規模もまた確定しない。

土坑SK3853は、建物SB3850よりも新しく掘られた土坑で、図47にあげた針書きのある土師器皿Ｂなど、藤原宮期に属す土器が出土した。

中区　東区が位置する丘陵の西裾にあたり、遺構検出面は、東に薄く西に厚く堆積する数枚の粘土層によってめまぐるしく変化しながら、著しく西へ下降する。遺構には掘立柱建物、掘立柱塀、土坑などがある。

掘立柱建物・塀はいずれも方眼方位に対して北で西に振れ、約13度のSA3860・SB3865・SA3867と、更に大きく振れるSA3864とがある。SB3865は梁間２間（柱間1.8m）、桁行２間以上（柱間2.5m）の南北棟建物で、その西2.1mにある南北塀SA3867はこの建物の西廂の可能性がある。SB3865の東側柱の東10.8mにある南北塀SA3860は、柱間1.8m等間で３間以上。SA3864は小型で浅い柱掘形をもち、等高線に直交するように北で西へ約50度ふれる。その他建物等にまとめられなかった柱穴についてもその掘形の向きが方眼方位に近いものはない。この点で東区とは異なる土地利用になっていたと思われる。

東区西端と中区東端とにまたがる土坑SK3856は丘陵を削って平坦な底面を作る。10世紀代の土器などが比較的多く含まれており、この丘陵部の削平はそれ以前のことである。また、その西の土坑SK3863は上部を削平された浅い土坑で焼けた榛原石と７世紀後半代までの土器が少量含まれている。

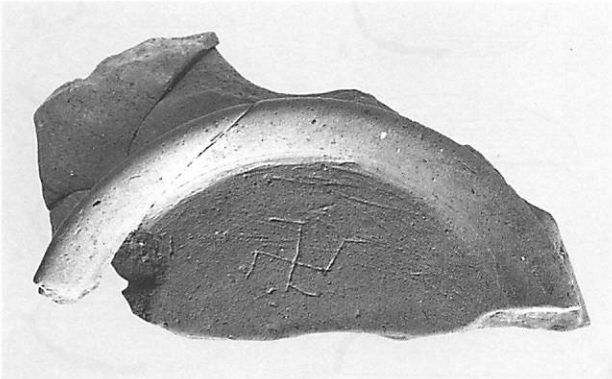

図47　土坑SK3853出土土師器皿（卍針書）

西区　丘陵裾から谷中央部にあたり、西１区の中程以西は軟弱な粘土が厚く堆積する。遺構には南北・東西方向の溝と斜行溝などがあり、柱穴はまとまらない。

溝SD3870は西１区東端の斜行溝で幅１ｍ、深さ0.2ｍ。堆積砂層には飛鳥Ⅰを主体とする土器が含まれ、上面は土器片を敷き詰めたように埋められている。東西溝SD3876は方眼方位にあった南北溝SD3875よりも新しく、黒色土器片を含む。南北溝SD3875の時期は明らかでない。まとまらない柱穴の多くは時期のわかる遺物に乏しいが、柱穴SX3874からは白磁椀片が出土し、その一端が平安～鎌倉時代にあることを推測させる。

西１区西端から西は沼状の粘土層が厚く堆積し、その最上層には平安時代の黒色土器が含まれる。

西２区の南北大溝SD3880は極めて限定された調査にとどまったが、幅２ｍ以上、深さ1.2ｍ。上半層にあたる炭化物混じり粘土層から飛鳥Ⅰを主体とする土器が多量に出土し、焼けた獣骨、焼土、種子のほか琴柱・横櫛などの木製品や加工木片も多い。溝は木の葉を主体とする木質物を多量に含む間層の下では幅１ｍとなり底部は平坦である。西区全体の堆積状況からみて、溝は谷の中央部に位置するが、底部の様相からは掘削された溝と考えられる。ただ、その行方と性格は明らかでない。

西端に位置する西３区では、青灰色砂（地山）上面で遺構検出を行ったが、中世段階には北にゆるやかに傾斜していることを確認したにとどまり、調査区西端に想定される東五坊大路に関わる遺構も検出されなかった。

出土遺物

土器・土製品・瓦類・木製品・自然遺物などがある。

土器には、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉・緑釉・白磁・青磁などがある。時期は古墳時代から鎌倉時代に及び、量的には土坑SK3856の10世紀代の土器、SD3880の飛鳥Ⅰの土器が目立ち、遺構に伴わないものを含めると飛鳥Ⅰの土器の存在が特徴的である。

なお、藤原宮期の土坑SK3853出土の土師器皿Ｂの底部外面にみえる「卍」の針書きは、類例（７世紀中頃の坂田寺SG100出土例など）からも、寺院に関連する文字であり、遺構や周辺地の性格を考える上で重要である。

ここでは、飛鳥Ⅰに属す土器としてまとまりのある溝SD3880出土の土器を示した（図48）。土器の器種には、土師器杯Ｃ（1～6）、杯Ｇ（7～8）、杯Ｈ（9～10）、皿Ａ、盤、高杯Ｃ（12～13）、高杯Ｈ、鉢Ｈ（11）、長頸壺（14）、鍋、甑、甕（15～16）と、須恵器杯Ｂ（19）、杯Ｈ身（25～29）、杯Ｈ蓋（20～23）、杯Ｇ身（18）、杯Ｇ蓋（17）、杯Ｘ（30）、高杯（24）、瓶、短頸壺（31）、長頸壺、フラスコ形細頸壺、甕（32）などがある。溝にはこの他に、陶邑古窯址群TK23窯出土土器と並行する段階の須恵器、土師器が混在するが、その量は限定的である。

土製品にはSD3880の土玉、SK3856周辺の土馬等がある。

瓦類は軒平瓦１点、丸瓦37点（4.3kg）、平瓦89点（9.8kg）が出土した。軒平瓦は型挽きによる四重弧紋軒平瓦で、10世紀までの土器を含む土坑SK3856から出土した。

木製品にはSD3880出土の横櫛・琴柱・棒などがあり、ほかに付札木簡と同じ加工のある木簡状木製品がある。

まとめ

今回の調査では飛鳥地域の東丘陵に近い部分に狭長な東西トレンチを入れることになり、そこでの土地利用のあり方を考える手がかりを得ることができるものと考えられた。以下、主にその点に関連する調査成果とその課題を指摘することで、まとめとしたい。

まず、東区において、規模の大きい建物SB3850を検出した。この建物は土坑SK3853と重複しており、出土遺物から、藤原宮期を含めそれ以前に位置づけられる。この建物の方位は、北でわずかに西へ振れており、藤原京の条坊の振れと共通するものである。これらの点を積極的に評価すれば、この建物を所謂大藤原京に伴うとすることも可能である。

調査地の北方約50ｍ、戒外川左岸の丘陵部に位置する奥山リウゲ遺跡は、図45の地形図によれば、今回の東区が位置する丘陵と同じ丘陵上にあるが、そこでも、同じ建物方位をもつ大規模な掘立柱建物を検出しており、時期も７世紀後半～藤原宮期とされていて、今回の建物の時期と同じである。両者ともに大藤原京の街区に営まれた建物とみることも充分可能な調査成果ではある。

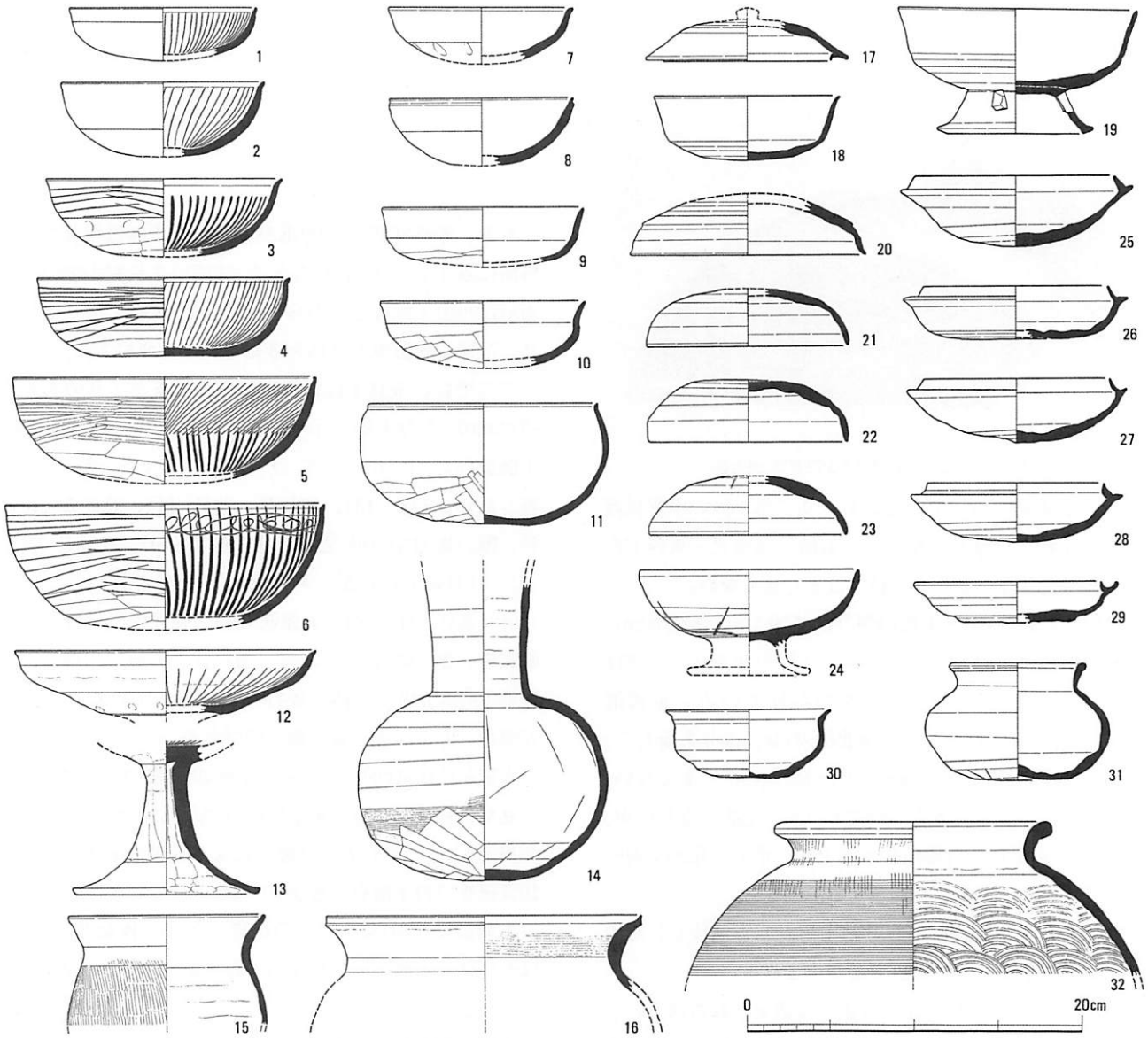

図48　南北大溝SD3880出土土器　1：4

しかし、今回の調査区の西半を占める谷部の中区・西区では、掘立柱建物等は丘陵の向きに直交あるいは平行した西へ大きく振れる方位で造営されており、方眼方位にのるとみえる溝も年代の判明するものは平安時代である。また、西３区西端に想定される推定東五坊大路も検出されていない。したがって、この建物SB3850の検出をもってこの地域に条坊街区が設定された傍証とするにはまだ問題が多い。今回の調査区の南、奥山から八釣にかけての樹枝状の丘陵部について行われた数少ない調査（図45のＡ・Ｂ地点）でも、藤原宮期を含む直前の時期の遺構や遺物が多くみうけられる。藤原京の条坊街区がどこまで施工されていたかの課題は、それらを含めて街区として認識できるか否かにかかっており、周辺地における今後の調査と多くの検討を必要としている。

また、調査では少なくとも平安時代までに丘陵の削平（東区）、谷の埋立整地と溝の掘削（中～西区）が行われていることが確認された。

前述のように、周辺の地形図（図45）によれば、東区ののる丘陵は「飛鳥城」と通称される中世山城へ至る大きな丘陵から派生したもので、東区のSB3850や奥山リウゲ遺跡の建物はそれらの一部を削平して営まれている。今回確認した谷はその間に形成されたものであり（図45の網目）、周辺の調査成果等を勘案すると、谷は奥山久米寺の南にのびるようである。

谷中央部に位置する西区で検出した溝SD3880には、古墳時代後期や７世紀初頭～前半の土器が含まれ、この谷の埋立整地や溝の掘削および周辺の開発は、少なくともその時期まで遡ることになる。ただし、それが「蘇我倉山田氏の邸宅」「山田寺」あるいは「阿倍山田道」の成立といかに関わるのかは明らかでない。その解明にはより明確な遺構の発見を必要としている。

（深澤芳樹・西口壽生）